

日本語を母語とする大学生英語学習者の  
英語ライティングにみられる傾向の分析  
— 学習者コーパスと記述式アンケートを用いた一考察 —

阿久津 純恵・青木 敦子・谷 みゆき

An Analysis of Japanese University Students' Written English:  
Questionnaire-based Analysis

AKUTSU Sumie, AOKI Atsuko, TANI Miyuki

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第6号 2015年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

*Studies in Language and Culture*, The Sixth Issue, March 2015

キーワード：英語ライティング、コーパス、アンケート、英語教育、SLA

## 要 約

本研究では、大学1・2年生の英語ライティングから学習者コーパスを構築し、アンケート調査と組み合わせることによって、日本語を母語とする英語学習者が英語ライティングの際に抱えている問題を分析した。その結果、多くの学生が、語彙力と文法力の低さを問題点に上げ、日本語で考え、英語で表現する際に大きな問題を感じていることがわかった。本稿では、大学英語教育において、より効果的に英語ライティング力を高めるには、日本語話者の書く英語の特徴を考察し、学習者の認識している問題点を分析しながら、具体的な改善方法を示した指導が必要であることを論じた。

## Abstract

The purpose of this study is to investigate an approach to improve Japanese university students' writing ability in English based on the analysis of their writings and questionnaires. A small-sized corpus was constructed using the writing data of Japanese university students, all of which were collected during the required English writing classes at universities in Tokyo. An analysis was made with an English native speaker reference corpus in terms of vocabulary and phrase, the result of which was then compared with review comments by students. The paper discusses that a majority of the students shared the same difficulty they faced in writing with some evidences from the actual writings and the comments by students. It will then suggest the necessity to raise students' language awareness of the difference between Japanese and English based on the analysis of the features of Japanese students' writings.

## 1. はじめに

第二言語習得 (SLA) 研究において、学習者の誤用は、一定の体系的な段階を経て改善されていくもので (Corder, 1967)、学習者の文法形態素の習得には自然な順序がある (Dulay & Burt, 1973) という主張がなされている。ここから、ある言語の学習開始から習得の間に学習者が使用する言語は中間言語とよばれ (Selinker, 1972)、学習者が段階をおって言語知識体系を発達させるという説が提唱されている。しかしながら、学習者の誤用傾向と学習者の使用回避傾向の区別をつけることは困難であるため、中間言語分析には限界がある点が議論されてきた。さらに、コーパスを用いた対照言語学 (CIA) においては、母語の異なる話者が産出する英語を比較し、母語の影響を受けたと思われる言語使用と、第二言語習得のなかで段階的にあらわれる言語使用の両方を考察すべきであるという主張があり、母語の影響について検証の手法が検討されている。

本研究では、外国語として英語を学ぶ過程において、誤用ではないけれども「英語らしい」とはいえない学習者英語が産出される背景を探ることを目的とし、学習者英語の傾向を学習者コーパス分析と学習者自身の自由記述式アンケート調査によって明らかにしようと試みた。

## 2. 先行研究

1990年代に学習者コーパス研究が開始され、コーパス言語学と SLA 研究の論理を用いながら、Granger (1998) の提唱する CIA の手法により、学習者による英語使用についてより深い考察が可能となった。たとえば、あるグループに特徴的に見られる特定の表現の過剰使用や過少使用の傾向における母語の影響に関し、母語話者コーパスと非母語話者コーパスの比較や、異なる母語を話すグループのコーパスを比較する CIA の手法を用いた考察がおこなわれている (Granger, 1998; Granger et al. 2002; Ishikawa, 2013)。CIA による英語学習者コーパスの分析手法には、主に2種類が考えられる (Granger, 2002)。

- 1) 英語以外の言語を母語とする学習者の英語と英語母語話者の英語を比較する。
- 2) 英語以外の言語を母語とする学習者の英語を比較する。

本研究では1) の手法を採用し、ICNALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English) の英語母語話者英語データを利用する前提でデータ収集をおこない (Ishikawa, 2013)、日本語を母語とする大学生の英語学習者コーパスを構築した。このコーパスを、ICNALE の英語母語話者コーパスと比較することで、語彙や表現の傾向に相違があるか検討した (Granger et al., 2002; Ishikawa, 2009)。さらに、自由記述式アンケートも実施し、コーパス分析と組み合わせることで、学習者自身が英語での表現が難しいと感じている具体的事例に注目し、その要因の考察を行った。

## 3. 研究の方法とデータ収集

本研究においては、ICNALE の英語母語話者コーパスとの比較を行うために、以下に示

すICNALEのライティング・プロンプトを全対象学生に与えた。

Do you agree or disagree with the following statement? Use reasons and specific details to support your opinion. “It is important for college students to have a part-time job.”

それぞれのデータ収集における条件の主な相違点は以下のようにまとめられる。

表1 データ収集条件

	本調査で用いた執筆条件	ICNALEの執筆条件
執筆時間	制限なし	20-40分
辞書などの使用	制限なし	使用不可
語数	制限なし *但し4-5パラグラフ・エッセイ	200-300ワード

ICNALEと執筆条件を統一しなかったのは、実際のライティングクラスの教室環境やシラバス・デザイン、学生の英語習熟度の相違等もあり、困難であったからである。しかしながら、実際のコースワークの一部として行ったことは、日本語話者の書く英語の傾向を測り、それを具体的教授法に活かす試運用として意義があると思われる。

### 3.1 対象者

本研究では、東京都内の私立大学3校の1年生および2年生の学生が対象者である。データ収集は2013年度後期と2014年度前期に行われた。対象者103名全員が、必修科目の英語ライティングクラス受講生である。英語の統一カリキュラムを実施している大学の学生が含まれているため、学部や専攻は多岐にわたる。

### 3.2 ライティングデータ収集

収集されたライティング課題は、各授業のシラバスに従い、授業の課題のひとつとして書かれたものである。英語エッセイライティングの教授が一通り終了したあとに出された課題であるため、アカデミックライティングのルールに則り、Introduction、Body、Conclusionによりエッセイが構成されている。自動翻訳を使用しないように指導したが、時間制限や辞書の使用制限は与えていない。また、学生が提出した手書きの原稿を第三者が電子データ化したものと、学生自身がデータファイルで提出した課題の2種類のデータが含まれている。

以下がICNALEとの比較用にコーパス化された英語ライティングデータ情報である。

表2 英語ライティング収集データ情報

学生数	103
男女比	男45 女58
ライティング数	103
総語数	25,361

各大学で、異なる執筆条件の下で書かれた課題であり、分析結果に相違がでる可能性も想定されたため、それぞれの大学および提出の方法を記号化し、エクセルとコンコーダンスソフトウェアを用いた検索のための準備を行った。

### 3.3 学習者英語コーパスおよび英語母語話者コーパス基本情報

すべての学習者ライティングはエクセルを用いて、学習者属性、アンケートコメントとともにデータベース化し、さらにライティングテキストはLancaster UniversityのUniversity Center for Computer Corpus Research on Language (UCREL) が提供しているCLAWS (The Constituent Likelihood Automatic Word-tagging System) を用いてPOSタグ付けした (CLAWS7 Tagset)。比較用の英語母語話者コーパスは、前述したICNALEの2つのサブコーパス (ENS1\_a\_PTJ\_001、ENS2\_a\_PTJ\_001) を用い、分析には、エクセルおよびコンコーダンスソフトウェア AntConc を使用した。以下が、本稿で使用したコーパス情報である。

表3 分析コーパス基本情報

	学習者 (NNS)	ICNALE 1 (NS1)	ICNALE 2 (NS2)
英語エッセイ数	103	100	100
延べ語数 (Token)	25,361	22,623	22,494
異なり語数 (Type)	1,709	2,085	2,487
エッセイ平均語数 (SD)	246.2 (116)	226.2 (22.1)	224.9 (22.5)
エッセイ最大語数	604	302	304
エッセイ最小語数	58	200	193
総センテンス数	1,928	878	910
1エッセイあたりの 平均センテンス数 (SD)	18.7 (8.4)	8.78 (2.76)	9.1 (2.30)
1文あたりの平均語数 (SD)	13.1 (2.9)	27.7	25.8
1語あたりの平均文字数 (SD)	4.8 (0.30)	4.34 (0.33)	4.6 (0.30)

今回作成した学習者コーパスとICNALEでほぼ同数の英語エッセイを比較したが、いくつかの顕著な相違点があられた。まず、それぞれコーパスの延べ語数には大きな違いがでている。これは、執筆条件の相違から、時間をかけてエッセイを準備することができた学

習者の方が、ワード数は大きくなったことが考えられる。2つ目は、学習者コーパスにおける一文あたりの平均語数が英語母語話者コーパスの半分以下である点である。総センテンス数は、英語母語話者の2倍以上であることも考え合わせると、学習者の書いたエッセイは非常に短い文で構成されていることが分かる。英語母語話者の最長の文は53語で、最短の文は13語で書かれていたが、学習者の最長の文は26語、最短の文は7語で書かれており、学習者は長い文の構成力に問題があり、長文を回避する傾向があると推測される。

#### 4. コーパス分析による使用語彙分析

本研究においては、ライティング執筆条件は統一されていないが、ライティングトピックが同じエッセイをほぼ同数比較できるため、語彙レベルでの相違点を明らかにするため、ICNALEの英語母語話者コーパスとの語彙使用についての比較を試みた。

##### 4.1 POS分析

阿久津・青木(2013)は、日本語を母語とする大学生のライティングを分析し、学生の使用語彙レベルが中学英語教科書で学習する単語に偏っていることを報告している。本研究でも、コーパス情報の異なり語数の比較により、英語母語話者よりも英語学習者の方が使用語彙の種類が少ないことが明らかになった(表3)。さらに、コンコーダンスを使用したPOS分析によると、品詞ごとの頻度について、以下のような結果がでた。

表4 学習者の品詞使用とその頻度

品詞	NNS		NS1		NS2	
	語数	比率 (%)	語数	比率 (%)	語数	比率 (%)
名詞	7,004	26%	5,298	23%	4,765	21%
動詞	5,788	23%	4,891	22%	5,000	22%
代名詞	2,179	8%	1,753	8%	1,676	7%
前置詞	2,358	9%	2,085	9%	2,181	10%
副詞	1,364	5%	1,560	7%	1,769	8%
形容詞	1,758	7%	1,335	6%	1,440	6%
冠詞	1,392	5%	1,525	6%	1,326	6%
接続詞	1,357	5%	1,722	7%	1,891	8%
その他	3,192	12%	2,685	12%	2,682	12%

まず、日本語話者の英語ライティングにおいてよく指摘されるポイントのひとつに、一人称代名詞“I”の過剰使用の傾向が挙げられる(Ishikawa, 2009; 小林, 2010)。今回は、“I”や“I think”の使用頻度が低い点が考察されたが(表5)、これはアカデミックライティングでは一人称代名詞の過度の使用を避けるよう指導した結果であると推測される。このため、代名詞の使用頻度には大きな過剰傾向がでなかったのではないかとと思われる(表4)。

表5 I/I think使用頻度

	NNS	NS1	NS2
I	319	550	417
I think	91	120	36

次に、学習者のライティングでは名詞の使用比率が高いことが示された。これは、ライティング課題のプロンプトにある英語表現をそのまま繰り返して使用することが大きな要因であると考えられる（阿久津・青木, 2013）。今回のライティングプロンプトにある“college students”と“a part-time job”の使用頻度が高いことから、同様の傾向が指摘できる（表6）。

さらに、可算名詞を単数形かつ冠詞を付けずに使用する誤用が多く観察された（表6）。日本語母語話者である英語学習者にとって、冠詞の使用、名詞の単数・複数や可算・不可算の区別が困難であることが多く報告されているが（Thompson, 2001）、その問題が反映されていると推測できる。これは、名詞の使用頻度が非常に高い割に、冠詞の使用頻度が少ない要因のひとつとしても指摘できる（表4）。

表6 ライティングプロンプトからの語句使用頻度

	NNS頻度（誤用数）	NS1頻度（誤用数）	NS2頻度（誤用数）
a part-time job	387 (0)	258 (0)	98 (0)
part time job	678 (239)	286 (0)	110 (0)
college students	342 (0)	119 (0)	48 (0)
college student	38 (27)	30 (13)	8 (0)

副詞の使用頻度については、英語学習者の場合は語彙力の低さと相関して、使用頻度が低い傾向を示すであろうと予測した通りの結果となった。今回の対象学生の使用した副詞は、英語エッセイの構成をしめす“first”や“finally”などのトランジションシグナルとしての副詞の使用に偏っており、英語母語話者コーパスに見られたような“well”、“really”“simply”、“just”、“already”などの副詞が学習者によってほとんど使用されていなかった。

また、接続詞の使用頻度も低く、これは、表3からも指摘できるように、学習者ライティングの文の長さが短いことと相関があると考えられる。ここから、学習者の書く英語が単文に偏りがちであり、接続詞を用いて重文や複文を作ることができない、または回避する傾向があることが推測できる。

#### 4.2 コーパス特徴語比較

コーパスを比較することによって、それぞれのコーパスにおいて特徴的に使用されているキーワード語彙を分析することができるが、この特徴語の比較においても、POS分析から明らかになった学習者英語の傾向が反映される結果が得られた。NNSの特徴語抽出に

は、AntConcのキーワード検索を使用し、対数尤度比を特徴語指数として以下の表に示した。この表から、頻度と特徴語指数が高いほど、学習者が特徴的に使用する傾向がある語彙であることを考察することができる。

表7 NNSの特徴的高頻出語

	NNSの特徴的高頻出語 (NS1 との比較)			NNSの特徴的高頻出語 (NS2 との比較)		
	特徴語	頻度	特徴語指数	特徴語	頻度	特徴語指数
1	money	393	123.337	part	805	265.62
2	they	621	118.064	money	393	219.134
3	job	743	87.677	you	295	200.239
4	society	98	85.559	can	488	192.432
5	can	488	75.642	job	743	179.48
6	importance	62	62.596	time	938	159.486
7	students	602	62.221	we	213	114.368
8	part	805	61.851	college	497	83.696
9	earn	89	61.552	people	168	82.19
10	conclusion	65	56.663	society	98	81.118
11	second	65	56.663	earn	89	61.189
12	university	100	51.568	conclusion	65	60.795
13	communication	43	45.619	second	65	60.795
14	study	138	45.329	friends	76	53.925
15	get	149	40.777	communication	43	53.427
16	we	213	36.125	things	109	50.757
17	useful	27	33.674	students	602	49.522
18	third	40	32.733	should	177	49.243
19	time	938	31.4	importance	62	49.171
20	various	38	30.535	good	159	43.332
21	first	84	30.284	lot	108	42.402
22	know	92	30.22	various	38	39.455
23	experiences	42	28.205	university	100	39.39
24	hard	77	28.03	hard	77	36.969
25	nt	22	27.438	third	40	36.701
26	college	497	27.06	college	61	35.951
27	concentrate	31	26.644	concentrate	61	35.951
28	good	159	26.459	good	28	34.79
29	human	21	26.191	human	73	33.458
30	people	168	26.027	people	92	33.022

NS1・NS2の両コーパスとの比較において、共通して特徴的であるのが、上位30語のうち、NS1との比較においては13語、NS2との比較では15語が名詞であったという点である。このことは、表4のPOS分析において明らかになったNNSの名詞の多用傾向を反映していると考えられる。

特徴語として抽出された名詞の内容とその使われ方を考察するため、NS1・NS2どちらの比較においても上位10語以内に入っている“money”、“society”、“communication”の3つの名詞に着目し、これらの語がどのような文脈で用いられているかコンコーダンスラインの確認を行った。“money”と“society”に関しては、今回のライティングプロンプトに対して、理由を述べる文の中に現れていることがわかった。“money”は「お金を稼ぐため」、「society」は、「社会勉強のため」という文脈で専ら用いられていた。また、“communication”は、アルバイトをすることの利点を述べる文で使用され、「コミュニケーション能力の向上」という内容が主であった。

次に、動詞の特徴語についてしてみると、NS1との比較では“earn”、“get”、“know”、“concentrate”、NS2との比較では“earn”と“concentrate”が高頻度語であった。この中で、“earn”、“get”、“know”に関しては、前述した名詞の特徴語との共起表現が多く見られ、“earn money”、“get communication skill (s)”、“know society”という表現となって表れていた。それぞれ、「お金を稼ぐ」、「コミュニケーションスキルを獲得する」、「社会を知る」という日本語の影響があるのではないかと推察される。

より抽象的な理由を挙げる場合、“importance”や“good”といった、基本語彙の使用頻度が高い。優劣や是非といった自分の価値観を表現するために十分な語彙を持っていないことが推測される。さらに、法助動詞の使用においては、“can”や“should”の使用頻度が高いが、次に示す特徴的低頻度語彙においては、“would”や“could”といった法助動詞の過少使用と対照的であり、学習者が婉曲的に意見を述べる表現が使用できていない様子が明らかになった。

表8 NNSの特徴的低頻出語

	NNSの特徴的低頻度語 (NS1との比較)			NNSの特徴的低頻度語 (NS2との比較)		
	特徴語	頻度	特徴語指数	特徴語	頻度	特徴語指数
1	i	319	100.011	that	280	112.75
2	that	280	82.404	would	26	96.818
3	my	64	57.526	s	7	88.805
4	as	83	47.402	and	447	76.708
5	s	7	41.787	just	6	67.873
6	and	447	41.419	as	83	51.808
7	well	10	39.931	the	549	48.972
8	this	68	35.442	believe	8	48.023

9	me	24	34.478	was	14	46.08
10	enough	15	32.559	or	70	46.079
11	any	9	31.676	then	16	44.004
12	find	17	29.997	could	3	38.059
13	focus	1	29.71	extra	1	35.698
14	really	6	29.554	well	10	35.42
15	studies	6	29.554	financial	7	34.475
16	no	10	29.429	i	319	31.828
17	to	824	28.732	really	6	30.971
18	just	6	27.099	studies	6	29.727
19	been	4	25.152	may	26	28.047
20	simply	1	23.923	education	2	25.373
21	responsible	3	23.069	on	95	24.315
22	out	14	22.916	this	68	24.034
23	the	549	21.727	been	4	24.011
24	already	1	21.057	more	56	22.01
25	extra	1	21.057	be	150	21.481
26	would	26	20.822	even	8	21.442
27	real	12	19.213	quite	1	21.15
28	major	2	18.466	to	824	20.366
29	graduate	9	18.262	any	9	19.464
30	way	24	18.2	better	14	19.146

“and” や “that” の使用頻度が特徴的に低いことは、学習者の書く文の長さの要因とも考えられる。学習者の “that” の使用の中で、接続詞としての “that” の頻度は200であったが、英語母語話者は、NS1は366、NS2は414という高い頻度で使用されていた。接続詞 “and” についても同様に、NNSは447に対し、NS1は579、NS2は655とやはり使用頻度に差が出ており、特徴語指数の高さからも、英語学習者と英語母語話者の相違点として認められた。

## 5. 学生アンケートの分析

本研究では、ライティング課題に加え、自由記述形式のアンケート調査を行った。調査は学期開始時、今回の課題提出時、学期終了時の3回実施し、コンピュータベースのアンケートを用いて回答を収集した。データ収集前には、この調査は学術及び授業改善目的であり、単位認定や成績に影響しないこと、個人が特定できる形での公開は行わない旨を説明した。

本稿で扱うデータ収集は、質問、学生の記述ともに日本語で行われ、のべ360名分の自由記述式回答を収集することができた。課題提出時には、「その特定の課題を書くにあたって

学習者が難しいと感じた点」(表9自由記述欄1)について記述させ、学期開始時および終了時の調査では、それぞれ「英語ライティングを難しく感じている理由」、「学期を振り返り英語ライティング全般に対する感想」(表9自由記述欄2・3)について回答させた。

表9 学生アンケートの記述例

	アンケート質問	学生コメント
自由記述欄1	特に英語で表現するのが難しかったことやその理由について、説明してください。	日本語で考えた文章が英語で表現できず、自分でできる安易な表現に直したことで、全体としての文章の論理がちぐはぐになり、本当に意味が通じているのかが自分自身では確認できない点が厳しかった。
自由記述欄2	ライティングの授業について、英語力、モチベーション等の観点から、自由に感想を述べてください。	高校よりもきちっとしたスタイルで英語の文章を書くことがすべて良かったです。
自由記述欄3	「英語で」ライティングをする際に難しいと思う理由、簡単だと思う理由を書いて下さい。	文法体系が日本語と全く異なるから。

### 5.1 学生コメント頻出語彙分析

テキストマイニングソフトKH Coderを使用し、上記の3回の調査で収集した自由記述の中で頻出した上位20語を抽出した(表10)。

表10 学生コメント頻出語彙

順位	抽出語	出現回数
1	書く	206
2	思う	163
3	英語	144
4	エッセイ	95
5	自分	83
6	文章	82
7	難しい	80
8	単語	75
9	日本語	56
10	書ける	53



表10の高頻出の語を中心に観察すると、ほぼ同じ内容を指す「単語(8位)」と「語彙(20位)」が共起語という点では異なる使われ方をされている点で興味深い。「単語」は「文法」という語とセットで用いられているが、それ以上の広がりを見せない。一方、「語彙」は「少ない」または「足りる」という語とともに用いられており、学生は「語彙」を規定するものは語彙サイズの大小であるというイメージを持っていると推察できる。さらに、「単語」と「語彙」はともに用いられる動詞または行為を示す語も異なっている。「単語」は「使う」あるいは「覚える」対象であるのに対し、「語彙」は「表現」や「伝える」という、ライティング行為の本質に近い語とつながっている。これらの点から、学生が高い関心を持っている「単語」と「語彙」という2つの語を使い分けていることが理解される。

### 5.3 学生コメントからの示唆

今回コーパス分析で明らかになった学生のライティングの傾向性と、前述した学生の「単語」・「語彙」に対するイメージについて、より深い考察を行うため、最後に、上記のKH Coderによる計量的分析をもとに、学生の個々の記述内容から学生が自分の課題だと記述している箇所をキーワード化し、分類する作業を行った。各記述についてキーワード抽出を行った結果、特に学生が難しいと感じていることとして「語彙不足」が頻繁にあらわれた。ただし、この語彙不足の具体的な内容は、前項のコーパス分析で明らかになったように、基本的な名詞への依存と特定の品詞の使用頻度の低さであるが、そのような洞察に至った記述は皆無であった。

この「語彙不足」というキーワードがどのような文脈で用いられているのか、該当するアンケートの記述内容を考察すると、「日本語から英語にならない」、「言い換えができない」、「ワード数が少ない」、「文が短い」というような他のキーワードとともにアンケート記述に現れることが多かった。実際のアンケート記述を引用すると、「簡単な表現ばかりでつまらない文章になってしまうので、もっと様々な語彙を使い分けられるようにしたい」、「文法と単語がわからなくて、知っている単語で書くと自分が日本語で考えていることと少し表現が変わってしまったのでまず単語を覚えようと思った」という例にあるように、多くの学習者が、自分の問題点と語彙不足との間に因果関係があると考えていることが推測される。

その他、「母語でも書くことが苦手」や「英語が苦手」というキーコンセプトも抽出され、英語やライティングの特定の側面に対してというよりも、書くという行為自体や言語そのものに対して苦手意識を感じている学習者も少なくないことがわかった。この2つのキーコンセプトを含む記述の場合、それをライティングが難しいと感じる理由として挙げるだけで記述が終わっていることがほとんどであり、それ以上の掘り下げや考察がみられないことが多かった。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語を母語とする大学生の英語ライティングにおいて、誤用や表現の傾向について分析し、さらに学習者の問題意識を考察することで、「英語らしい英語」を妨げている要因を探り、具体的な指導方法に応用する可能性を検討した。

英語学習者コーパスと英語母語話者コーパス比較の結果から、学習者に導入できる語彙や構文がより具体的に示された。より長いセンテンスを書く指導とともに、具体的な副詞の使い方や、推量の法助動詞の使用を促すことで、学生が書く英語の質を向上させる可能性があると思われる。

ライティング課題作成時に辞書使用が許可されていたにもかかわらず、辞書の使用が「語彙不足」「単語がわからない」「表現できない」という学習者自身が抱える問題の解決には至っていない。このことは、辞書のより効果的な使用方法の指導の重要性を示唆していると思われる。さらに、今回の研究から浮かびあがった英語母語話者のアカデミックライティングと日本語話者の英語アカデミックライティングにみられる語彙レベルでの差異について、英語母語話者はどのような場面でどのような品詞の語を選択する傾向の強いのかなど、学習者たちに具体的な内容を指導する必要がある。実際の英語表現方法をより具体的に提示するために、より多くの英語エッセイを読ませ、文脈の中で英語表現を学習させるなどの工夫も指導に取り入れるべき課題である。

アンケートの中には、パラグラフやエッセイの構成をはじめて学んだことに対する肯定的コメントも見られ、形式を知ることによって英語ライティングの上達に達成感を感じている学習者の様子が窺える。英語エッセイのサンプルを用いて、エッセイの構成を指導することで、書き方が分からないために抱く英語ライティングへの苦手意識の軽減も有用であると思われる。

本研究で使用した学習者コーパスでは、英語エッセイライティングの指導により学習者が一人称代名詞“I”の使用を避けた結果が表れているが、NS1およびNS2のエッセイを確認したところ、予想以上に自由かつカジュアルなスタイルで書かれたエッセイが多く含まれていることが分かった。従って、コーパスの比較結果の有効性については、より詳しい検証が必要である。また、学習者の中間言語の変化について調査するために、学習者プロフィールを分析にとりいれた英語習熟度別コーパスの作成が次の課題である。

学習者コーパス分析とアンケート分析から、英語エッセイライティングの指導の効果が表れていることは評価できるが、日本語と英語の差異に悩む学習者に具体的解決方法を提示する必要性が明らかとなった。日本語と英語の言語的違いを意識させ、学習者が抱えている問題に対してより具体的な解決方法を提示するライティング指導教材の作成が課題である。

## 参考文献

- Corder, S.P. (1967). The significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.
- Dulay, H. & Burt, M. (1973). Should we teach children syntax? *Language Learning*, 23, 95-123.
- Gass, S.M. & Selinker, L. (1994). *Second Language Acquisition: An Introductory Course*. Amsterdam: John Benjamins.
- Granger, S. (1998). *Learner English on Computer*, London: Longman.
- Granger, S. (2002). A bird's-eye view of learner corpus research. In S. Granger, J. Hung and S. Petch-Tyson (Eds.), *Computer Learner Corpora, Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*. Amsterdam: John Benjamins, 38-51.
- Granger, S., Hung, J., & Petch-Tyson, S. (Eds.) (2002). *Computer Learner Corpora: Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ishikawa, S. (2009). Phraseology overused and underused by Japanese learners of English: A contrastive interlanguage analysis. *Phraseology, Corpus Linguistics and Lexicography*, 87-100.
- Ishikawa, S. (2013). The ICNALE and sophisticated contrastive interlanguage Analysis of Asian learners of English. In S. Ishikawa (Ed.) , *Learner Corpus Studies in Asia and the World 1*, 91-118.
- Scott, M. & Tribble, C. (2006). *Textual Patterns: Key Words and Corpus Analysis in Language Education*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 10/3, 209-231.
- Thompson, I. (2001). Japanese Speakers. In Swan, M. & Smith, B. (Eds.), *Learner English: A Teacher's Guide to Interference and Other Problems. Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press, 296-309.
- 阿久津純恵・青木敦子 (2013). 「日本語を母語とする大学生英語学習者の英語ライティングにみられる傾向の分析—語彙と共起表現に関する一考察」『桜美林論考』26-37.
- 小林雄一郎 (2010). 「日本人学習者の英作文における人称代名詞について」『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』1074-1077.
- 樋口耕一 (2004). 「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』(数理社会学会) 19(1) : 101-115.

付記：本研究はJSPS 科研費 23652146の助成を受けたものです。